

平成27年度岡山県農林水産総合センター水産研究所 試験研究課題評価票

<事前評価>

- 総合評価凡例 5：優先的に実施することが適当 4：実施することが適当  
 3：計画等を改善して実施することが適当 2：実施の必要性が低い  
 1：計画等を見直して再評価を受けることが必要

課題名	モクズガニ資源回復に向けた取り組み						
課題の概要	モクズガニは、内水面漁業において重要な漁獲対象種であるが、近年その漁獲量が減少しており、内水面漁業関係者等から資源回復に対する要望が強い。そこで、種苗の安定供給を図るとともに、放流効果を検証する。						
評価結果	区分	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
	必要性	0人	3人	3人	0人	0人	3.5
	有効性	0人	3人	2人	1人	0人	3.3
	効率性・妥当性	0人	1人	3人	2人	0人	2.8
	総合評価	0人	3人	3人	0人	0人	3.5
助言・指摘事項等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今まで他機関でも研究を行ってきたが、殆ど成果が見られていない。何か新しい手法で研究するのでなければ、成算があると言えるのか疑問である。</li> <li>・種苗生産の技術開発(初期生残の向上)や放流方法・放流サイズの確定に相当の試行錯誤も含めての努力が必要。</li> <li>・まず生活史(生態)の全容の把握が基本的に必要で、計画されている内容は時期尚早と考えられる。</li> <li>・抱卵親ガニの安定確保では現状維持ではないか？</li> <li>・本県の内水面漁業への経済価値付加に大きな期待が持て、漁業のみならず他の産業への展開も期待でき、多少のリスクはあっても取り入れていくべき。</li> <li>・予備調査や研究方法をしっかりと情報収集し取り組んでいただき、達成に困難が予想される課題があるが、少しでも多くの知見が獲得できるよう頑張ってください。</li> </ul>						

平成27年度岡山県農林水産総合センター水産研究所 試験研究課題評価票

<事後評価>

- 総合評価凡例 5：著しい成果が得られた 4：十分な成果が得られた  
 3：一定の成果が得られた 2：見込んだ成果を下回った  
 1：成果が得られなかった

課題名	モガイへい死原因究明調査						
課題の概要	モガイの大量へい死原因を究明する緊急対策として、環境調査、種苗の疾病調査、食害生物調査を行った結果、クロダイやヒトデなどの食害による減耗が著しいことがわかった。また、対策として、囲い網による食害防除試験を行ったところ、クロダイの食害に対しては一定の効果があつた。						
評価結果	区 分	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
	目標達成度	0人	0人	5人	1人	0人	2.8
	有効性(効果)	0人	1人	4人	1人	0人	3.0
	有効性(目的以外の成果)	0人	1人	5人	0人	0人	3.2
	効率性・妥当性(費用対効果)	0人	2人	4人	0人	0人	3.3
	効率性・妥当性(計画)	0人	0人	6人	0人	0人	3.0
	成果の活用・発展性	0人	2人	2人	2人	0人	3.0
	総合評価	0人	4人	0人	2人	0人	3.3
助言・指摘事項等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・捕食・被食の関係がモデル化できるのではないのでしょうか？</li> <li>・斃死原因を究明したこと、防除方策を考案したこと、成果を漁業者に還元したことは評価できる。</li> <li>・モガイ養殖は収益性が高いとのことなので、有効な手段となるよう、更に食害の有効な防護策を検討していただきたい。</li> <li>・原因究明調査としては妥当な結果。取り組みは終了と思われるが、資源(漁獲量)の動態には注目されたい。</li> <li>・食害による減耗が結論付けられたが、その他の原因は皆無かどうか、なぜ近年になってその影響が著しくなったのか？魚が増えたのか、ほかのエサが減ったのかなど、対策に結びつくような原因究明には至っておらず、費用対効果の面でも大いに疑問が残る。継続しての研究をお願いしたい</li> </ul>						

平成27年度岡山県農林水産総合センター水産研究所 試験研究課題評価票

<事後評価>

- 総合評価凡例 5：著しい成果が得られた 4：十分な成果が得られた  
 3：一定の成果が得られた 2：見込んだ成果を下回った  
 1：成果が得られなかった

課題名	藻場生態系復元実証事業						
課題の概要	造成及び天然アマモ場において、水質環境、生物群集及び周辺海域の漁獲動向を把握することで、アマモ場面積の拡大と魚類生息密度の増加に正の相関が認められるなど、アマモ場の回復に伴う藻場生態系の再生過程を明らかにした。						
評価結果	区 分	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
	目標達成度	0人	0人	6人	0人	0人	3.0
	有効性（効果）	0人	1人	5人	0人	0人	3.2
	有効性（目的以外の成果）	0人	4人	2人	0人	0人	3.7
	効率性・妥当性（費用対効果）	0人	0人	5人	1人	0人	2.8
	効率性・妥当性（計画）	0人	1人	5人	0人	0人	3.2
	成果の活用・発展性	0人	3人	2人	1人	0人	3.3
	総合評価	0人	2人	4人	0人	0人	3.3
助言・指摘事項等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・株密度と質量密度、密度増加率の関係を明らかにすべき。</li> <li>・長いスパンで実施して初めて成果が見えてくる事業で、長年取り組んで、全国的に評価の高い事業の検証と成果の確認は重要であり、今までの研究調査方法は妥当である。</li> <li>・藻場面積が広がった点では成果が見られ、今後も手法などの改良研究を続けてより天然に近づくことを願っている。</li> <li>・漁業者だけとの研究にとどまらず、行政・他県の研究機関・NPO法人・民間ボランティア、学校などと協働することで、情報の共有化が進み、藻場の重要性や環境活動への意識の醸成、日本の漁業の実態などへの一層の理解が期待される。</li> <li>・藻場は従来からその重要性が指摘されていた。結果は予期される内容を実証した点で、妥当であった。「今後の課題」を堅持してやっていただきたい。</li> </ul>						

平成27年度岡山県農林水産総合センター水産研究所 試験研究課題評価票

<事後評価>

総合評価凡例 5：著しい成果が得られた 4：十分な成果が得られた  
 3：一定の成果が得られた 2：見込んだ成果を下回った  
 1：成果が得られなかった

課題名	天然アユの資源回復研究						
課題の概要	県下のアユの産卵盛期は10月上旬（水温条件だけからみると9月中旬）から11月下旬（11月上旬）の長期にわたり、禁漁期の延長が必要と考えられた。一部の魚道では流速が速く遡上の妨げとなっていたが、魚道の段差、傾斜を緩やかにしたことで、稚魚の遡上が改善された。						
評価結果	区 分	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
	目標達成度	0人	4人	2人	0人	0人	3.7
	有効性（効果）	0人	2人	4人	0人	0人	3.3
	有効性（目的以外の成果）	0人	4人	2人	0人	0人	3.7
	効率性・妥当性（費用対効果）	0人	1人	5人	0人	0人	3.2
	効率性・妥当性（計画）	0人	3人	3人	0人	0人	3.5
	成果の活用・発展性	1人	4人	1人	0人	0人	4.0
	総合評価	0人	5人	1人	0人	0人	3.8
助言・指摘事項等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指標の選択や図化の工夫が必要。</li> <li>・産卵孵化から遡上までを、資源管理回復の観点から検証し、その阻害要因を抽出して改善に取り組んだことは有意義である。</li> <li>・産卵場や産卵期の確定など目立った成果が上げられた。また稚魚の遡上に関して魚道の改善などがなされ、資源の涵養に役立つ結果も得られた。成果を資源回復に役立てて頂きたい。</li> <li>・アユの産卵期間が長いということが実証され、禁漁期間を延ばすという対策まで提示できており、魚道の改良についても、アユが遡上でき易くなっていることがわかるので、今後は関係部署とも協働して、三大河川にふさわしい有用で環境にも配慮した魚道や堰への改良を進めていただきたい。</li> <li>・河川の生物生産力の回復を図ることは、河川の水質環境や広く瀬戸内海の環境にまで影響を与える取り組みであると思いますので、継続的な取り組みを期待します。</li> </ul>						